

國學院大學學術情報リポジトリ

神道の連続と非連続：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

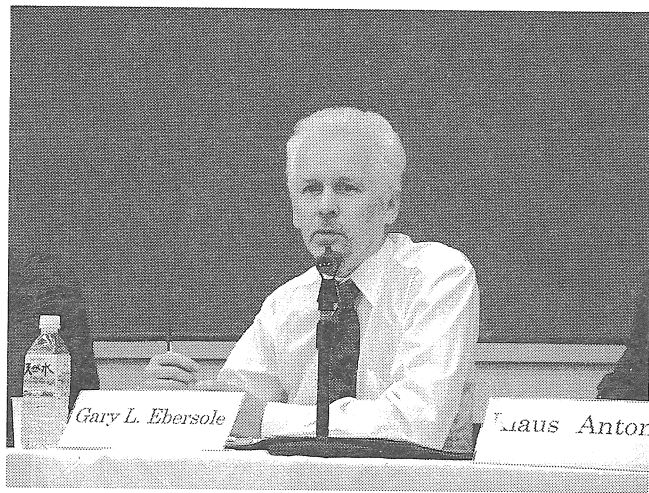
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, エルマコーワ, リュドミーラ, ブロトンス, アルノー, ランベッリ, ファビオ, エバソール, ゲイリー・L, アントーニ, クラウス, 川村, 邦光, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000504

セッション2

〈発題4〉

宗教史研究における神道の扱い

ゲイリー・L・エバーソール



【司会（ハイヴンズ）】これから、第2セッションの後半を開始させていただきます。セッションの後半はゲイリー・L・エバーソール（Gary L. Ebersole）先生です。エバーソール先生はシカゴ大学で学位を取ってからオハイオ州立大学、そしてシカゴ大学を経て、9年前からミズーリ州立大学カンザスシティの教授となりました。いま現在は同大学の歴史と宗教学の教授とともに、宗教学研究の所長を務めています。日本の宗教だけではなくて非常に多岐にわたる研究をされる先生としてよく知られていますが、1989年に画期的な研究の1つを出しましたが、それは『古代日本における儀礼的詩と死の政治学』という本を出して非常に高く評価されています。今日の発表は、アメリカにおける神道の教育といますか、東洋学のなかの神道という位置。そして、過去と現在について発表していただきます。

それでは、エバーソール先生、お願いいたします。

発題

ゲイリー・L・エバーソール

【エバーソール】エバーソールと申します。どうぞよろしく。僕の話は、このシンポジウムのテーマからちょっと離れています。「神道の連続と非連続」ではなくて、僕が話をしたいのは神道研究のなかの連続と非連続です。

アメリカにおける神道研究は、ここ100年ぐらいの間、変則的なものでした。ロンドン大学教授のジョン・ブリーン(John Breen)先生とオスロ大学のマーク・テーウエン(Mark Teeuwen)先生が最近出版した神道についてのエッセイ集がありますが、その本のタイトルの *Shinto in History: Ways of the Kami* は、その変則的な実態をよく示しています。そのタイトル、「Shinto in History」というのはとても奇妙です。なぜなら、「Christianity in History」とか、「Judaism in History」とか「Buddhism in History」とか、「Hinduism in History」など、そのようなタイトルは見あたらないからです。

確かに、「Shinto in History」という題名は、本の焦点が神道の歴史的背景であることを示しています。でも、歴史的背景に焦点を当てることは他の宗教研究の場合なら当然、言わなくてもあたりまえのことです。こと神道研究となると不思議なことに話が違ってきます。なぜなら、長い間、神道は均等で普遍的な伝統宗教というふうに紹介されてきました。たとえば、1987年に出版された *Encyclopedia of Religion* の中に「神道」というエッセイがあります。そのエッセイに、平井直房先生が次のような文章を書きました。「神道とは日本の伝統宗教に与えられた名前であり、日本国が成立する前から現在まで連続してきた宗教である」というような言い方です。

この考え方のように、日本の学者も西洋の学者も、長い間、神道を伝統と解釈し、何世紀もの間、普遍的なまま連続してきたというように神道を描いてきました。ある意味で、その描写の仕方は、西洋のほうに tribal group とか、いわゆるプリミティブな宗教の描き方

にとっても近いです。例えば、学者たちは長い間ナバホ・インディアンNavaho-Indianの宗教を伝統と解釈し、ナバホの文化とアイデンティティから切り離せないものであり、長い間、不変なものであると言ってきました。しかし、いま学者たちはだれもそのようなことは書きません。他方、いまでも神道になるとまた別な話となります。なぜ、このはつきり不正確である神道の描写がこんなに長い間、幅広く世間にまかり通ってきたのでしょうか。西洋の神道研究の流れを理解するためには、神道研究そのものの歴史、つまり神道研究史を理解する必要がありますと思います。

いままでのパネリスト、およびこれから発題されるアントーニ先生も含めて、われわれはみな歴史からみる神道に興味があります。これはある意味で、神道研究の中の非連続をとる立場です。しかし、私は黒田俊雄先生のように、長い期間における神道という言葉の意味の変化も研究するべきだと思います。黒田先生は、「神道は19世紀になるまで明確な宗教としては存在していなかった」と力説していました。もちろん、これに反対する人もいます。しかし、ここで重要なのは、黒田先生が真剣な討論を公開したという点です。

黒田先生の研究は、1980年代まで西洋に紹介されていませんでした。その後、ようやく、神道は不変で日本固有の宗教であるといったような、それまでの表現の仕方が変わりはじめました。

そのほんの一例ですが、私はいま授業中に近代以前については「神道」という言葉は使わず、「the Kami cults」を使っています。グリーン先生とテーウェン先生は最近、神道と神社をはつきり区別することが大切だと言っています。彼らはこう言っています。

Shinto ... refers to structures (organizational, doctrinal, or both) that aim to integrate individual shrine cults into a large, national, or even universal system.

これは重要な方法論的アプローチです。このアプローチは以前、アラン・グラパール(Alan Grappard)先生が「学者たちは日本における“religious multiplex”つまり寺社と社寺の研究をするべきだ」と言ったことを支持しています。

さて、今日私がテーマにしたいのは、西洋の学者たちがなぜ前に述べたような神道の姿を描くことになったのかということです。今日は時間に限りがありますから3,4冊分だけの研究例をとって、日本と西洋の研究者が英語で書いた神道の姿の core elements についてお話しします。くわしい神道研究史を研究している学者はすでに何人かいます。彼らは過去および現在の学者たちが使ってきたカテゴリー、例えば神道、宗教、国体、大和魂などのようなカテゴリーを研究してきました。たとえば、このシンポジウムのなかでもすでに問題としてとりあげられています。これはいいことだと思います。これからお話しされるアントーニ先生は国体の話、大和魂などのカテゴリーを研究しています。このような批判的分析の歴史は、宗教学および神道学が発展するためにとっても重要だと思います。

西洋の学者が神道研究をはじめたのは100年あまり前のことです。それから現在にいた

るまでの間に、簡単に言うと3つのタイプの研究が出ました。

その1つは、明治時代の国学者たちが描く神道、2番目は、ロマン派の目で見た神道、3番目は、1930年から1950年ぐらいの間に書かれた、国家神道に反対している研究。この時期は、もちろん、それは戦争が起こりそうなときと起こったときです。アメリカにとって日本は敵となったため、その時期に国家神道について書かれたものは、反対という態度が非常に強く、国家神道は宗教ではないし、ナショナル・イデオロギーだとするようなものがいっぱい出ていました。今日は、その最後のタイプについての話はしないで、1番と2番のほうの話をします。

では、まず4つのポイントから始めたいと思います。西洋の研究者が19世紀から20世紀の初めにかけて日本に渡って神道に出会いましたが、それは明治の神道であったという点です。つまり、国家神道であったわけです。

2番目のポイントは、19世紀に使った知識および解釈のカテゴリーは、例えば、プリミティブ・レリジョンとフォーク・レリジョン、アニミズム、トーテミズム、これは全部19世紀の社会の政治見解から離れられなかったものであり、また、研究者たちのモダニティーの解釈によって、そのカテゴリーが用いられ、神道の描き方が変わってきたという点です。

3番目のポイントは、アメリカ人がはじめて神道について学んだ時期というのは、ちょうど日本とアメリカが「宗教」、あるいは「religion」というものを定義するという点において反対の方向に動こうとしていたときにあたっていました。たとえば、明治憲法は宗教の自由を謳いましたが、実際には新宗教および「邪教」は強い政府の弾圧を受けました。また、同じときに明治政府は神道は法のうえでは宗教ではなく、日本国家の道徳であると定義しました。

他方、同じときに、アメリカのほうは「religion」という言葉を新しく使ったわけです。19世紀の中頃まで、学者たちはみな、世界中には宗教がひとつしかないと考えていました。その「ひとつ」とは、もちろんキリスト教のことでした。ほかの宗教は宗教ではなくて「pagan cults (邪教)」であると呼んでいました。しかし、19世紀の終わりごろになると新しいカテゴリー、つまり religion という言葉を使うようになり、キリスト教はその中の1つとして研究されるようになったのです。私がいいたいのは、日本はまるで逆だったということです。すなわち、religion・宗教という新しいことばを使って、神道はほかの宗教とは別のものであるというようになりました。これは、アメリカの事例とはまったく逆になっています。両方とも religion・宗教ということばを使ったけれども、その使い方がたがいに反する方向にむかったわけです。

4番目のポイントは、西洋および日本の双方の学者たちの神道の描写方法が、西洋の学説の影響を強く受けていた点です。また、社会と政治の圧力もあり、人によっては精神的なノスタルジアの影響が強かった点です。19世紀後半から20世紀初期にかけて、アメリカ人は神道を西洋の日本研究者、つまりジャパノロジストから学びました。たとえば、アーネスト・サトウ(Sir Ernest Satow)、バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)、

W. G. アストン(W. G. Aston)、ミッシェル・ルボン(Michel Revon)たちです。彼らの研究は—無理のない話ですが—当然、日本の学者の研究をもとにしたものです。それに加えて、何人かの日本の学者は神道について英語で出版し、また、アメリカ国内で講演もしました。たとえば、加藤玄智や姉崎正治がそうであり、西洋人に神道を紹介しました。ちがう種類の人々もいました。宣教師やロマン派の人気作家、たとえば、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)やパーシバル・ローウェル(Percival Lowell)などが神道の西洋のイメージを形づくることに貢献しました。

まず、このロマン派の例からみてみたいと思います。1894年にローウェルは、*Occult Japan, or The Way of the Gods*という小さな本を出版しました。このタイトルが指しているのは、もちろん神道のことです。ローウェルは、明治政府が新しく取り入れた国家神道というものを大幅に無視しました。この本には国家神道について何も書いていないのですが、そのかわり彼は自分が御嶽山に登ったときの予期していなかった神の啓示について書きました。彼は、御嶽山で日本人の性質および本能に根ざした、昔から変わらない真の日本の宗教の心を発見したと書いています。ローウェルによると、神道の特徴は神がかりや神おろしであるといえます。彼はまた、神がかりはもともとあった宗教であり、いま現在も日本にあるのだと主張しました。彼が御嶽山で発見した神道は、きのうブロトンス先生が熊野についてお話しされたなかにも同じような見方がありました。

ローウェルの本によると、神道とは原始的かつ神秘的な宗教であり、いま現在でも神と交流することが可能であるような宗教であるといえます。じっさいには、御嶽講は1830年代になってからようやく流行したものです。ローウェルは、そのことを知らなかったかもしれないし、あるいは無視したのかもしれません。とにかく、御嶽の宗教が歴史的な存在であることは絶対に認めていないし、全然書いてありません。またローウェルは、明治の日本の知識人がハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)のような西洋の学者から学ぶことに反対しました。すごく残念なことだと思っているのです。ローウェルのいうような「神道」なることばは、ロマン派のいう *Volksgeist* のような言い方です。西洋学者、とりわけエドワード・タイラー(E. B. Tylor)は、自然信仰とアニミズムは文化の原始的段階だと考えていました。しかしながら、それに反対するロマン派のような人は、段階としてのものの見方をとりません。彼らは、ルソーのように永遠の太古から現在まで連続してきた宗教は純粋な本当の宗教であるとしたのです。とにかく、このローウェルのような人においては、19世紀から神道と自然の関係というような話が出ていたわけです。

このように神道というカテゴリーは、19世紀の学者によっていくつか全く異なるように使われていたわけです。彼らが *modernity* に対してどんな意見を持っていたかといえば、それは *primitive religion* です。いいことか、遅れているか、この違いです。ここで、ローウェルの考え方と姉崎の考え方を少し比較してみたいと思います。姉崎は、スペンサーのような研究方法を持つべきだと思っていたわけです。例えば、彼が英語で書いた有名なもの、*History of Japanese Religion* の前書きに次の文章があります。

In putting this book before the Occidental public, the author, an Oriental, wishes to acknowledge his indebtedness to the modern science of the Occident. For it is modern science that has trained his mind in its methods and scope, and opened his eyes to many aspects of the present subject which otherwise would have remained unnoticed.

姉崎先生が描いた神道が、神道研究史のためにはとても大切であるそのひとつの理由は、彼は scientific historian として仕事を研究したいと思ったことにあります。それなのに、ときどき姉崎も国民の心と同じようなことばを使います。例えば、次の文章にそれがよく現れています。これを読むと、100 年以上続く、神道を描く要点が入っていることがわかります。

Shinto, the indigenous religion, was an outcome of the people's life and temperament, closely connected with national traditions and social institutions. Shinto was originally an unorganized religion, having hardly any system of doctrine; but its cult well embodied the nation's ideas and sentiments, and its influence has persisted throughout the vicissitudes of the nation's history.

National unity and social solidarity were always maintained by the reverence towards the ruling family, belief in the divine origin of the Throne being inseparable from the worship of the Sun-goddess."

もうひとつ彼が書いたのは「神道は日本の宗教の根っこである」ということです。姉崎先生の、Religionswissenschaft の研究にも同じような Volksgeist のテーマがみられます。

さて、時間があまりないので、次は 1926 年に加藤玄智が書いた *A Study of Shinto* についてちょっと話をします。加藤先生は、19 世紀の evolutionary theory は神道にとって問題はないと考えました。彼は、古代神道のなかに自然信仰、それはずっと primitive な自然信仰があります。それを認めました。プレ・アニミズムのところもあります。アニミズムもある。フェティシズムもある。そして、トーテミズムさえ神道にあると書きました。彼は神道史に、道徳と知的思考がじょじょに現れてきたように感じました。とくに、倫理的考えが強くなってきたと感じていました。彼がこのように神道を描いた目的は、西洋人が日本のことを進んでいる国とみるようになることでした。少し時代が下ると、1930 年代からしばらくの間の研究には国家神道に関して反対する研究が多いです。例えば、ダニエル・ホルトム(Daniel Holtom)という先生がいくつかの本を書いて出したのがひとつの例です。あと、有名なルース・ベネディクト(Ruth Benedict)教授が書いた『菊と刀』もその例のひとつだと思います。

1950 年に入ると、新しい研究はあまりありません。そのかわりに、日本の宗教というと禅になっています。鈴木大拙(貞太郎)が英語でいくつかの本を出して、禅と日本文化を一緒とする見方を示しました。そしてアメリカ人はみな、「ああ、日本の宗教は禅である」

と思いました。このとき、神道は、ある意味で忘れられました。国家神道は religion ではないのだから、日本人の宗教は何でしょうというと、鈴木は「禅です」といいました。1970 年になると、また神道に興味がある人がちょっと多くなった。なぜかというひとつの理由は、そのときアメリカ国内でエコロジーへの関心が多くなったことです。また、同じときに日本政府と日本の旅行会社が「日本は神道のおかげで、産業大国にもかかわらず、いまでも自然が残っている」というようなイメージをつくったのである。僕が言いたいのは、これがものすごくいいマーケティングだったということです。JTB のポスターがアメリカのあちこちに貼ってあって、その日本のきれいなこと。そのイメージがいまでも残っています。

つい最近、2002 年にスチュアート・ピッケンズ(Stuart Pickens)が出した本、*Shinto: Meditations for Revering the Earth* という本があります。あれを見ると、100 何年前の言葉をそのまま使っています。例えば、こういう文章があります。

Shinto is not “man-made, artificial, or invented. Its sentiments, beliefs and responses were drawn from direct communion with the natural.

反対からいえば、特別の宗教であるのは神道だけです。つまり、神道は人間がつくり出した宗教ではなく、元来から自然と人間がそのままに残っているコミュニオン、それがいまでもある。ローウェルが書いたものと全く同じような見方です。いまの本は学問的な本ではないけれど、僕が言いたいのは、そのような歴史のない神道、タイムレスな宗教であることを望んでいる外国人は十分まだいます。ある意味で、新しく神道を論じた研究では、神道は green religion、自然を大事にする宗教である。これはもちろん、神道の日本の学者もそのような書き方をしています。

もうひとつの例をあげます。これは私の恩師であるジョセフ・キタガワ(Joseph Mitsuo Kitagawa)のことです。キタガワ先生は長い間シカゴ大学に勤めた、Religionswissenschaft (宗教学) の大事な人です。それなのに、日本のことになるとキタガワ先生にも、さきに述べたのと同じような描き方が見られます。キタガワの同僚であったエリアーデ(Mircea Eliade)先生は、人間みんなホモ・シンボリクス(homo symbolicus)である。つまり、すべての宗教に起こる facts は象徴的であると主張しました。でも、キタガワ先生は仏教が日本に入る前の日本人の宗教は例外であると唱え、pre-symbolic であったと書きました。言葉が違って、アニミズムということばはもちろん使っていない。フリー・アニミズムを使っていないけれども、描いたことは全く同じです。ことばが違って、でき上がったイメージが同じなのです。1970 年代に書いたものを読むと、これはいったいキタガワを読んでいるかなと思う。なぜかと言うと、『万葉集』の歌を証拠として使っています。神と直接かかわる気分が生まれる。日本の心から。

僕が言いたいのは、100 年あまりの間の学者たち、神道研究をした人たちは、自分のスピリチュアルなノスタルジーとか、どうしても見たかった神道を見たんですね。神道その

ものは、僕が思うにはないわけです。神道というのは、議論のなかにいる人々がつくったイメージです。ある学者、ある人はどこか遠いところ。熊野のうんと奥の山に、ローウェルは御嶽山、ほかの西洋人はチベットとかインドにあると思っていました。歴史の学者になると我々はよく黄金時代は過去のところに置きます。例えば、梅原猛だったら黄金時代をどこにおくでしょうか。キタガワ先生は仏教が入るまえに黄金時代を設定します。

最後ですが、こんにち新しい神道研究の学者がいっぱい生まれています。私は、そのなかには入りませんが。その人たちの研究にもものすごく期待しています。なぜかと言うと、彼／彼女たちはその 100 年余りのような研究はもうしていません。ある意味で非連続研究です。でも、僕が期待しているような研究を少しだけは言いたいと思います。

最後のポイントですが、まず神道のマイクロ・ヒストリーが読みたい、学生に読ませたいと思います。マイクロ・ヒストリーというのは、ローカルなヒストリーです。例えば、きのう、川村先生は神道という言葉はあまり使いませんでしたが、祭ですね。ランベッリ先生が言ったのは、祭はいつも同じ日にあるけれども時間がたつと、意味が違ふし、雰囲気が違うということでした。僕の学生であったスコット・シュネル(Scott Schnell)という先生、アイオワ大学に勤めている先生は岐阜県の祭のことを書きました。それは、250 年間の歴史です。そうすると、全然違う意味でお祭をしたことがわかります。だから、まずはマイクロ・ヒストリーなのです。そうすると、Shinto ではなくて Shintos、複数形になると思います。もう 1 つは、神道は宮司からだけではなくてピープルの声の研究が欲しいのです。

3 番目は、女性のほうからの神道。今日はシンポジウムの 2 日目ですが、ここまでジェンダーという言葉はまだ聞いていないのです。女性、男性の関係と宗教はどういうことか。あちこち見ていると、これからそれがふえるのです。若い人が英語で発表しているものにおいては、ジェンダーはよく使われているカテゴリーです。

最後は、この連続と非連続のことは宗教の発生を研究するべきだと思っています。例えば、最近の日本に漫画から宗教が生まれています。アメリカだったら、サイエントロジーはサイエンスフィクション、サイファイ(sci-fi)から生まれています。これはおもしろいと思います。一応、フィクションでもその宗教、その社会的リアリティを生むことが可能であるわけです。

井上先生は最近、*Shinto: A Short History* という本を出しました。私は英語に翻訳されたものしか読んでいませんが、そのなかで、makers と users ということばを使っていました。僕は、その makers と users という論じ方にはあまり興味がありません。なぜかと言うと、例えば金光教とか天理教とかは users のほうから新しい宗教が生まれているからです。

ともかく、これからの研究に期待しています。100 年の間に繰り返して描いた神道はどう十分で、これから、まずは Shinto in history。不思議だけど、21 世紀になってやっとこういうような研究が英語で出てきました。

コメントと質疑応答

【司会】ありがとうございました。では、いまコメンテーターとして国学院大学日本文化学研究所助手の遠藤潤さんをお願いしたいと思います。

【遠藤潤】遠藤です。簡単にコメントさせていただきます。何点かありますが、第1点目として、エバーソール先生の研究史の整理ということについて、コメントとちょっとした質問をさせていただきます。

先生はアメリカにおける神道研究の3タイプということで、第1の型として明治の神道についての理論、第2としてロマン派の神道。第3として、国家神道をイデオロギーとして批判する研究—これは1930年代から1960年代—というような形で3つに整理をされたのですが、神道研究から若干視点を広げて、日本以外の地域からの日本研究を考えてみると、やはり70年代にさかのぼって、近代化論の視点からの日本研究というのがどうも印象に残っており、日本語でも紹介をされています。そういう視点からの神道研究というものが、もしアメリカの研究者の中にあるようでしたら少しそのお話をさせていただきたいと思います。あるいは、先生のあげられた3タイプのなかのどこかにそれが整理されて取り込まれてしまうのかということをおうかがいしたいと思います。

2点目は、神道とモダニティの関係ですが、今回ご紹介していただいた研究史をみると、やはり神道というものがアメリカの研究者のなかで取りあげられるときに、近代というものと逆方向に向かうもの、あるいは、ある種、近代にないロマンティックなものを示すものとして描かれているのですが、明治の初めごろの日本の神道のあり方の実情をみると、どうも近代の初めの明治初期の神道政策には、ある種の啓蒙、すなわち enlightenment という方向を当初目指していた面もあると思うのです。アメリカの研究において、そのような側面はずっと無視されていたのかどうか、ということをおうかがいしたいと思います。



それから3点目、これはちょっと大きい問題なのでまた議論になると思いますが、どうも研究史の話をずっとつかうかとありますが、比較研究であるとか、異文化を理解しながら何かを考えていくときの落とし穴というものが如実に現れているような気がします。というのは、たとえば私たちが自分にとって異なるというか、奇妙だとか、変わっているなというものを体験したときに、その違いが何に由来するのかということを考えていったとき、「日本人だから」とか、「欧米人だから」というような形でアイデンティティを構成しながら違いを理解してゆく。それは学問のなかでもそういうことが当然あると思いますが、そうした中で、時間的な側面を落としながら、ある種の特徴、「日本社会の特徴はこれだ」というふうな議論にどうしてもなりがちだということがあると思います。それは神道研究を無時間化していく、歴史を超越して神道をとらえてしまうということです。これは当然、日本における神道理解もそういうことをつねに繰り返してはいましたが、日本以外の場所から神道を理解するといったときに、一番大きい前提としてはそのような問題があるのではないかと感じました。

あまり長くなったり細かくなったりするといけませんので、とりあえずこの3点でお願いいたします。

【エバーソール】僕が話したのは、アメリカの英語で書かれたものだけです。神道研究史全体からすると、ドイツでどういうものを書いたとか、オランダ、フランス、イタリアのものを全部見るべきです。見ると、おもしろいと思います。たとえば政治関係、戦争のときはオランダはドイツ向きになっており、ライデン大学に勤めている研究者が書いたものと同じときのものをアメリカの神道の研究と比較すると、神道が同じものと思えないほど離れたイメージになります。

2番目の質問ですが、僕が神道研究史のなかで興味を持っているもののひとつは学者が何を見逃したかということです。知っていても、見ないように描けないようにしたわけですね。例えば、バジル・ホール・チェンバレンは *Transactions of the Asiatic Society of Japan* に、新しく生まれる神道というような題、“Birth of a New Religion”というタイトルで文章を書きました。それは国家神道のことで、不変と変化ということでは、もちろん変化のほうです。それはみんな読みうるものでした。あるいは事実のことは書いたけれども、すぐ忘れてしまいました。その説はそこに置いて、またそのロマンティックのような日本とか、国学者の言葉をそのまま使って神道のイメージを一般的な英語の読者に渡しました。それはどうしてなのか、僕はその学者の心をもっと知りたいのです。

【遠藤】ちょっと補足的な質問になりますが、近代化の問題を扱ったときなどに神道の問題が取りあげられるということは、その時期は直接はそんなにはなかったのですか。よく、日本文化論のなかで、日本が資本主義的に成功したのは日本社会に理由があったということが、ある意味で政治的な理由もあって、さかんに言われた時期がありましたが。そのときに、神道というのはどちらかと言うと無視されるような形になるわけでしょうか。

【エバーソール】そうです。もうひとつの大事なポイントですね。religionということばが

使われるまえには、アメリカの大学では、department of theology が一般的でした。どこへ行っても department of theology、神学です。ところが、急に religion ということが出てきた。教会がつくった学校でも、どんどん theology department がなくなるのです。そして、department of religion がつくられます。

さきほど言ったように、キリスト教はそれから世界中の宗教のなかのひとつになります。いろいろの理由はあるだろうと思うけれども、近代化が進むにつれて、キリスト教を信じなくなった人が多いのです。それだから、同じ程度のものとしてほかの宗教と比べることができたのです。そのなかのある部分の人たちには、それでもスピリチュアルな探求があつて、どこかに事実の本当の宗教を探した。ある人は、それはチベットにあるし、ほかの人はインドである。ヨーロッパの流れ。そして、その中のある人は日本、それがいまだに残っているんです。そのイメージの連続がおもしろい。いまでも十分残っているんですね。

一番よく使っている教科書、テキストブック、バイロン・エアハート(Byron Earhart)という先生が書いた *Japanese Religion*、サブタイトルは *Persistence and Change* です。これは、連続と非連続ですね。その本を読むと、変化のことについて書かれているのはほんの一部で、その連続してきたことが 90%以上でしょう。そのイメージを毎年何 10 万の学生に読ませているのです。

【遠藤】ありがとうございました。

【司会】では、これから 20 分ぐらいを質問の時間にしたいと思います。質問がある人は立って、自分の所属と名前を述べていただきたいと思います。

【ナカイ】上智大学のケイト・ナカイです。エバーソール先生よりも遠藤先生の質問に対しての、半分質問、半分コメントですが…。近代化と神道の関連ですが、おそらくアメリカの研究のなかでいちばん宗教と近代化を関連づけたのはロバート・ベラー(Robert N. Bellah)の *Tokugawa Religion* (『徳川時代の宗教』) という本ですが、—かなりまえに読んだので、ちょっとはっきり記憶していないのですが—そのなかでは神道をあまりあつかっていないのではないかと思います。やはり、心学か浄土真宗、武士の思想などをぜんぶ一応 Tokugawa Religion の範囲のなかにとりいれたのですが、神道にはふれていません。

【エバーソール】ありがとうございます。

【新田均】皇學館大学の新田と申します。先生が言われたなかに、19 世紀後半の宗教の概念が日本とアメリカでは正反対の方向に行ったというお話ですが、私はちょっと違うと思います。そのことを述べる前に、その根拠がよくわからなかったのもう一度ご説明いただければと思います。

【エバーソール】遠藤さんのほうが説明はできるかもしれないけれども。僕が言いたかったのは、religion というカテゴリーです。当時の日本の法律では、神道は宗教ではなかった。日本の心から生まれる宗教的気分とか道徳など、いろいろですが、とにかく、世界の宗教のなかのひとつであるという意味で使われたのではない。アメリカのばあいは大学のなかの問題です。それは日本とは反対で、キリスト教は世界の宗教のなかのひとつにすぎない。

何の特権ありません。ただ、アメリカの学校の授業から離れたら、また別の話ですね。Separation of church and state は、アメリカの憲法にも書いてあります。でも、事実としては、まだまだ問題があります。たとえば、Pledge of Allegiance があります。子どもたちは毎朝アメリカの旗の前で "I pledge allegiance to the flag of United States of America, and to the Republic for which it stands, one nation under God, indivisible, with liberty and justice for all." ということばをとねえます。このなかには「one nation under God」という 1950 年代に付加されたことばもここには含まれています。でも、大学の授業のなかでの見方は違うのです。

【新田】大学ということで比較するならば、いまの日本の研究では 19 世紀後半において宗教学が入ってきて、しだいに宗教概念が日本でも拡大していったというのが通説だと思います。ただ、それに対して政治の分野、政府の政策ではいまおっしゃった憲法の時代ではなくて、むしろもっと下がった明治 33 年の時点で政策的に宗教と区別するようになりました。それで、大学における概念がしだいに国民のあいだに広がっていったので、その齟齬があったから大正時代に入って神社問題という、神社は宗教かどうかという問題が起きてくるので、単純に日本は宗教概念が狭くなっていったとは言えなくて、むしろ広がっていったので問題が生じてきたというふうに解釈するべきではないでしょうか。

それから、憲法の問題でもおっしゃいましたが、アメリカのばあいはやはり連邦憲法と州の憲法との問題がありますので、州レベルにおいては、先生もおっしゃったように 19 世紀は州と教会が一致しているところもありましたので、単純に連邦憲法を日本の帝国憲法と比較することは無理ではないかと思います。

【エバーソール】はい。ありがとう。

【司会】ほかの方。

【井上】今日のお話は、アメリカの神道研究の連続と非連続ということでしたが、それが神道の連続・非連続というテーマにどういう意味を持つかということでお聞きしたいのです。

今日おっしゃったなかで、神道のいわば単純化、あるいは理想化されたイメージというものがあるところのポイントがあったように思います。アメリカのなかでの神道研究者の数も少ないし、基本的な情報もあまり集まっていない。英語による情報も少ない。そういうなかで、つまり、アメリカの研究者の側の条件によってそういう傾向が出てきたというふうに考えていらっしゃるのか。それとも、仏教とかイスラームというものに対してはあまりそういう傾向はないけれども、神道が対象になるとそのような傾向になるのだという、そちらのほうをおっしゃりたかったのか。その辺をちょっとお聞きしたいのですが。

【エバーソール】まず、なぜ僕はこのようなテーマにしたのか。シンポジウムのテーマが神道にあるのに、僕は神道ではなくて神道研究をフォーカスしたのか。さらに、なぜ英語で書いたものを対象としたのか。はっきり言うならば、僕は神道というものはないと思います。神道はディスコースのなかにあるだけです。ランベッリ先生の意見とちょっと近い

と思いますが、神道はいくつかの神道があります。それは、井上先生から見た神道、姉崎正治の神道とか、いろいろで、同じように“Christianity”というのもないのです。なぜかと言うと、これもランベッリ先生が言い出した“Christianities”があるのです。

もうひとつ、よく書いていて教えているのは、大学のポストが開かれるとき、多くのばあいには Japanese religion、単数の名詞ですね。それだから、また問題だと思います。この「神道の連続と非連続」というテーマは、神道というものはもうあるのだというように僕には聞こえます。そのつもりでなかったかもしれないけれども、僕はそれをちょっと問題にしたいのです。アメリカのほうからだけではなくて、本当の神道、神道のエッセンスはない。フォイエルバッハ(Ludwig Andreas Feuerbach)は *The Essence of Christianity* (『キリスト教の本質』) を書きましたが、われわれ学者たちはエッセンスは探さない。だから、神道そのものは、姉崎先生、平井直房先生のような偉い先生が国家成立以前からと言いますが、そのような言い方はもうできなくなったのです。本当に言えなくなっています。よろしいでしょうか。

【井上】先生のおっしゃっているような、神道が最初からあるというのは、私から言わせると神道の本質論的な議論ということになると思います。しかし、現在の神道研究では、そういう方もいらっしゃいますが、宗教学や歴史学、いろいろな研究をしていて本質論的な立場からやる人は少数派だと思います。つまり、日本人の根っこには神道というのは昔からあって、それは変わらないものだと言説は、神道家が「そうであってほしい」という気持ちで書いているものがあります。それは、キリスト教者が「キリスト教はこうあってほしい」と思うキリスト教の論理、あるいは仏教徒が書く、それと同じことであって本質論的です。神学論的な立場といえます。

でも、ここで議論しようとしているのはそれとは別で、やはり神道として学問的にとらえられるものがあるのかどうかということを議論しているので、それは複数形の Shintos になってもそれはかまいません。でも、Shintos と言うならば、そこにいくつの神道が入ってくるのか。Shintos というのはいいというのであれば、そこにはそうやってまとめられる Shintos があるというのもひとつの立場になるわけです。その根拠は、どこにあるのですか。Shintos ではなくても、神道という概念そのものがいらないのだ、不必要であるという立場もあるいはあるかもしれません。それが一番ラディカルな批判になると思いますが、私は Shintos という立場は神道の連続と非連続という議論の中にすっぽり入ってくる議論だと思います。

それを大前提としたうえで、なぜ英語圏の議論がそういう本質論的なところに非常に関心を持つのかということに、逆に私は興味を抱くわけです。先ほどの遠藤さんの質問にもありましたが、近代化論などのなかでも神道は当然議論されていると思います。積極的に神道が近代化に貢献しなくても、逆に言えば神道的な宗教は近代化を疎外しないタイプの宗教であるという主張もあります。先生が触れられなかった英語圏の研究、あるいは、そういうものがあまりないのであれば、なぜこちらのほうに焦点がいくのか。それがとても知りたいことです。

【エバーソール】まず、そんなに多くの研究がないわけです。そのなかの例としてローウェルを選んだのは、これが早い時期のロマンティックのイメージだからです。それと比較すると、つい最近2年前に出たスチュアート・ピッケンズの本はこれにものすごく似ています。そのことがひとつです。姉崎先生のことをちょっと話したのは、姉崎先生は日本の宗教学史のなかでもものすごく大事な人で、世界のなかでも宗教学のチェア chair〔講座をもつ教授〕として大学に入ったのは初めてではないか。その意味では、social science のほうの人であった。それに関して彼が使ったことばは問題です。もっと時間があれば彼の位置を説明したいのですが、彼はある意味で難しい位置にいたのです。東京大学のポストは、学問的世界と政治関係の世界のあいだでした。ただ、ある意味で彼がそのことば使った理由は政治的な理由でもあったかもしれません。

【井上】日本の学者のそういう理由ではなくて、英語圏の研究におけるこうした特徴を知りたいわけです。それはたとえば社会科学からはあまり神道に関心がなく、哲学的な分野で関心を持つ人が多いのでこういう結果が生まれたということでしたら、それはひとつの説明だと思います。あるいは、やはりキリスト教的な神学の影響の強い方がその目で神道を見たからこういうふうになったということかもしれない。なぜ、そういう特徴が出てきたか、先生の英語圏の研究傾向に対する説明をお聞きしているのです。

【エバーソール】遠藤さんに回答を頼むかもしれない(笑)。ひとつは、現代社会に対してどのような気持ちを持っているかによって神道の見方がまったく違ったんですね。現代主義者、西洋化と近代化、産業化、それがいいと思った人による神道の見方がひとつめです。それに反対する者なら、昔から変わらないような宗教という見方です。とくに日本は19世紀、急に工場がいっぱいできて経済的に強くなった。僕が言っているのは、あるアメリカ人の学者はノスタルジーとして日本の宗教を見た。たとえば、ローウェルは神がかりのようなことは、彼のまわり、つまりアメリカでもあるにもかかわらず、どうしてそっちは言わないのでしょうか。ペンテコステ教会とか、メソディストのキャンプミーティング、毎年夏にいっぱいあって、同じような様相を呈している。なのに、そっちには行けません。やはりキリスト教が信用できなくなっただけの時期には、外国にまだ Golden Age が残っているように考える。その目で、ある学者は日本の宗教を見ました。もちろん、禅の見方も同じです。

1950年代になったら禅がもっと早くて、アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)、ローレンス・ファーリンググティ(Lawrence Ferlinghetti)か、そのような beat poets (ビート詩人)はものすごく日本の宗教に興味をもっていました。その対象は神道ではなくて仏教の禅でした。また、1960年に入ると、今度はインドの宗教がはやる。アメリカは、そういう意味で不思議な国です。時代によってある宗教がはやって、べつのある宗教にはまったく興味がなかったりする。そして大学院に入って何を勉強するか、それによるんですね。

【司会】最後の質問をお願いします。

【ランベッリ】札幌大学のランベッリです。質問というよりも、いまの井上先生の質問に対してのコメントですが、まず最近の英語圏の研究のなかで、近代化と神道の関係について

ての研究がないということではないと思います。ヘレン・ハーデカー(Helen Hardacre)による国家神道の研究やジェームズ・ケトラー(James Ketelaar)の神仏分離・廃仏毀釈についての研究などがあります。ケトラーの研究は国家神道が近代化の重要な第一歩だったということを明らかにしています。それに先立つ時期に、アラン・グラパールは遠野峯における神仏分離の研究のなかで、廃仏毀釈あるいは神仏分離そのものを日本の文化大革命と呼んでいるという事例もあります。これは80年代後半です。このような、つまり文化大革命ということを主張するときは、これは非連続を主張することになるわけですが、非連続が主張されるのは、おそらく、欧米における知識の体系の変化にともなうものでもあると思います。いわゆるポスト構造主義とか脱構築とか、そのような思想体系がはやりはじめるときに、歴史、そして歴史の叙述、言説について批判的な見方をするようになるわけです。

ただし、エバーソール先生が描いたような神道研究の状況は、たぶん英語圏だけではなくてイタリア語圏だとか、ほかの国の研究もよく似ていると思うんですね。基本的には、80年代まではほとんど神道というものは日本人論に学んで、神道は日本文化の中核だというふうに描かれている研究も書籍も多いわけです。80年代になると、少しずつこのような状況が変わっていくわけです。文化のなかに中核たるものはないだろう、あるいは、さまざまなアイデンティティの可能性はあるだろうとか、そういうふうなアプローチをとっている、とくに若手研究者はだんだんふえてきたわけです。

では、なぜそういうことになっているのかというと、これはつまり、なぜ神道のなかに、あるいは、日本のなかにこういう特別な中核があるのか、あるいは西洋とは本質的に違うものがあると求めたいのかということになると、それはたぶん西洋的な他者へのまなざしのあり方だと思うのです。

つまり、ふつうは、西洋を中心的に考え、その周辺にあるものを排除したり、抑圧するというイメージですが、これがひとつです。つまり、日本人は西洋人とは明らかに違う。もっと原始的な状況にある。だから、アニミストである、そういうふうな見方もあるかもしれません。だけど逆に、全く違うものに対しての憧れということも込められているような気がします。ですから、これはラフカディオ・ハーンも明らかにそうですが、日本は違うからこそ日本に来了。そういうようなこともあるので、あくまでも否定的にとるべき現象ではありません。もちろん、研究としてはあまり価値がないかもしれませんが、ある文化的な雰囲気を現す記述として、記録として、ある程度意味があるのではないかと思います。

【司会】 ありがとうございます。申しわけありませんが、時間を超過しましたので、ここで質問は打ち切らせていただきます。

次のセッション3に入る前に、10分の休憩をとります。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)